

新連載

実験的教育論 [2]

現場の先生たちに充電の 時間を与えてほしい

まちだそうほう

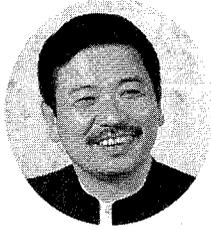
東京外国語大学教授 町田宗鳳

休暇中は出勤を求めるときではない

前回、「教育はすべからず実験的であるべきだ」という意見を述べたが、そのような実験的教育を試みるには、現場の先生たちに、それなりのガッツと見識が必要となる。新しい教育の在り方について、なんら具体的なイメージが湧いてこない人たちに、実験的教育をしてほしいというのは、無謀な話である。

私の著書の一つに『野性』の哲学』（ちくま新書）というのがあるのだが、全国模試や主要な大学入試の現代国語問題に頻繁に引用されている。入試体制を批判するような内容の本が、毎年のように入試問題に使われる皮肉な状況に、自分でもいささか驚いているのだが、その中で私は次のような文章を書いている。

グローバル社会に生きていかななくてはならない若い世代に、日本の未来を託そうと思うなら、従来の管理教育はすみやかに廃止しなくてはいけない。もちろんそのことによって、学校側の格差が広がるだろうが、より魅力のある教育を創造していくためには、現場の教師が少しでもやる気を起こし、彼らが〈野性〉的思



町田宗鳳（まちだ・そうほう）1950年生まれ。14歳で出家し、臨済宗大徳寺で修行した後、34歳で寺を離れ、渡米。ハーバード大学神学部修士課程、ペンシルバニア大学中東・アジア学部博士課程を修了、プリンストン大学、国立シンガポール大学などを経て、現職。専攻は比較宗教学、比較文明学、生命倫理学。ホームページ：www.tufs.ac.jp/ts/personal/scho/

考力を働かせやすい環境を提供することが不可欠となる。そのような動きにブレーキをかけ、前世紀的な権威主義を維持しようとするなら、文部科学省や教育委員会は一日も早く解体されるべきだろう。

ところが一般論としていえば、学校の先生というものは、大学で教職課程をとって、他の学生よりもマジメに勉強して、卒業後、競争率の高い教員試験に合格し、運よく教壇に立つことになった人たちだから、〈野性〉の思考力を持ち合わせていない。

着任して後は、日々の校務をこなすのに精一杯の状況に置かれている。教室の外でも、部活の指導や地域貢献の仕事などに追われ、ほとんど休む暇もなく勤勉に働くうちに、ますます〈野性〉的思考力から遠ざかっていく。

つまり、一個の人間としても教師としても、充電の機会がほとんど与えられていないわけだ。せっかくの夏休みや冬休みも、何やかやと出勤が義務づけられていると聞いている。いったい誰がどのような理由で、そのようなルールを先生たちに押し付けることになったのか、不可解でならない。

他の業種の人間が少なくとも週五日間四十時間働いているのに、教師だけを特別扱いするわけにはいかないというのは、まったくの屁理屈であって、かつては聖職とも呼ばれた教師という仕事の特殊性を考慮したものではない。

人間を磨く時間が必要

教育というのは、技術ではない。教授法というのは日進月歩なので、それを習得する努力には必要には違いないが、いちばん大きな教育要素となるのは、教壇に立つ人間の資質そのものである。われわれの学校時代を思い出してみても印象に残っているのは、どこか人間臭さを漂わせながら、正面から生徒のことを見つめてくれていた個性的な先生たちである。

となれば、まじめに勉強することによって取得した教

員免状だけでは、教師たる資格があるわけではない。とくに若い先生たちには、学校に就職した後も引き続き、知的に、そして人間的に成長してもらわなければいけない。そのためには、学校の休暇中を最大限に利用して、自己充電をせよ。もうべきではないだろうか。その間は、なるべく校務から離れてもらって、各教師が個人的にいちばんやりたいことに充実した時間を費やすのが望ましい。

一人の人間として、人生をエンジョイすることを知らない退屈な人間が教壇に立つことほど、感受性豊かな子どもたちに有害なことはない。いつもイキイキとして、生きることの喜びが全身からにじみ出ているような先生こそが、教室でオーラを放つのである。

マジメな先生ほど、授業の準備や進路指導、さらに山積する校務で神経をすり減らすことになる。挙句の果ては、不登校になる先生も少なくないと聞く。オーラどころの話ではない。

だからこそ、休み中は十分な英気を養ってもらわなくてはならないのだ。読書に耽るのもいいし、なんらかの研究テーマを徹底追求してみるのもいい。あるいは、アウトドア・スポーツで体を鍛える人もいるだろう。来る

べき新学期に、リフレッシュされた心と体で臨めるよう休暇を最大限に活用することが眼目であり、その中味は個人の判断に任せればよい。

大学教育は少し事情が異なるが、私が国立シンガポール大学で教えていたとき、なんと毎学期一科目のみが担当ノルマであった。二時間の講義を週に一度行い、あとは学生を少人数のグループに分けて、ディスカッションをするだけでよかった。

そのぶん、担当した講義とディスカッションの内容は充実させなくてはならない。その結果は、毎学期末に行われる学生の授業評価で如実に表れてくる。それを学内のイントラネット上でやらないことには、期末試験が受けられないことになってるので、必ず履修した全学生から評価を下されることになる。

あまり低い評価が続くと、三年目にはやってくる任期が更新されなくなり、高い評価が続くと学部長から表彰され、大幅な昇給が行われる。このへんは、中国人社会特有のプラグマティズムがあるわけだが、こうなれば、さすがに各教員は自分の授業に手抜きが許されなければかりか、プラスアルファの創意工夫をすることになる。

おかげでシンガポール大学に奉職中は、時間がふんだ

んにあったので、ほぼ毎月のように東南アジアの国々を旅したが、それが原動力になって、私は三年足らずの間に六冊の本を書いてしまった。それがまた、研究者として高い評価を受けることになったので、まるで遊びながら昇給してもらったようなものである。

教師の留学に奨学金を出すべき

大学とは事情が異なっても、初等中等教育の先生たちにも、ぜひ豊かな時間を与えてほしいというのが、私の切なる願いである。もし長期休暇を利用して、海外ボランティアに出かけたいという先生がおられたなら、そのことによって教師としての見聞も人生体験も深まるのだから、地元教育委員会なり学校なりが、気前よく補助金を出してもいいのではなからうか。

あるいは、留学をして専門分野における修士号などの学位を取得したいと考えている先生たちには、二年なり三年の期限を設けて、奨学金を出すべきだ。それによって、日本の教育水準が高まることになるのだから、決して無駄な投資ではない。

また日本と海外の教育事情の違いを学ぶには、研究員などという肩書きでお茶を濁さず、学生として留学する

にかぎる。へたすれば落第するかもしれないという緊張感の中で学んでこそ、身につくものがある。それは高卒という肩書きのまま、三十四歳で大学院に留学し、円形脱毛症にまでなつて苦学した私の言い分である。

私がアメリカの大学で教えていたとき、日本の省庁からキャリア組のエリートたちが、次々とやってきた。テクノクラートとして日本の行政を牽引していく人たちだから、彼らの国際感覚を養うために、そういう機会が与えられることに異議を唱えるものではない。

しかし一年の研修期間中に、実質的な成果を上げる人は少ない。たいていは語学的なハンディがあるため、地元学生に混じつて受講するということなく、ここぞとばかりに同伴家族と観光旅行をして回ることになる。

そのようなエリート官僚に多額の手当てを与え、ぶらぶらと一年遊ばせる予算があるなら、現場の先生に一人でも多く留学の機会を与えてほしいというのが、私の意見である。このごろは、一年間の履修で修士号を出す大学も少なくないのだから、滞在中に必ず学位を取るぐらいの意気込みで留学すべきだろう。

人を指導する立場にある者は、できるだけ多くの「場を踏む」ことが大切だ。何十年も、まじめに学校に通勤

しているだけでは、人間性を深めたり、人生観を豊かにすることはできない。

アメリカのビジネス・スクールでは、大学卒業後、企業での職務経験をもつことを入学条件にあげているところが多いが、それと同じように、日本の学校でも実社会でサラリーマンや商売を経験した人物を優先的に採用すべきではないだろうか。そのほうが教師として、はるかに合理的で、豊かな発想力をもつことになるからだ。大学という職場でも、若いときからアカデミックな世界しか知らない教員にかぎって、権威主義的で、柔軟な思考力を欠いていることが多い。

また国際会議に出て発言したり、NPOの国際的活動に積極的に関わるような先生も、どんどん登場してほしい。自分が「井の中の蛙」みたいな生活をしていて、生徒に「国際人になれ」と発破をかけるのは、おかしし、説得力を持たない。

マジメであることがいいのか

逆説的な言い方をするので、決して誤解してほしくないのだが、私は「マジメな先生が、マジメな教科書を大マジメに教える教育は、子どもたちにとって最悪の教育

である」という教育的信念をもっている。

そのような窒息するようなマジメさに、十年以上も晒され続けた若い魂にどのような影響が起きるか、想像しただけでもゾツとする。そのようなマジメな先生たちこそが、子どもたちが持っている天然の想像力や発想力を奪い取ってしまったのである。そして、その自覚すら持てないほど、そういう先生たちはマジメなのである。そういうのを「病、膏肓に入る」というのだろう。

本質的な教育改革を実現するには、まるで目玉焼きをひっくり返すような発想の転換が必要である。そのためには、自分たちが良かれと思って、一生懸命やっていることが、かえって悪影響をもたらしていることもあるのだ、という一歩引き下がった見方が不可欠である。

やがて問われる現場の判断力

ところで、OECDが実施した二〇〇三年国際学習到達度調査で、フィンランドの子どもたちが、読解力と科学的リテラシー（活用能力）がトップだった。以来、人口約五二〇万人の北欧の国の教育のあり方に注目が集まり、各国から視察が相次いでいるらしい。

前の教育大臣はフィンランドの天然資源は何かと問わ

れたとき、「木と頭」と答えたという。昔からの林業に加えて、質の高い教育によって国際競争力のある人材を育てているという自負から出た発言だろう。日本の文部科学大臣が同じことを聞かれれば、なんと答えるのだろうか。「いや、天然資源は乏しいのですが、引きこもりと不登校と家庭内暴力なら、国中に溢れています」と言わざるを得ないかもしれない。

フィンランド教育が優れた成果をあげている原因として、いくつかが指摘されているが、成績によって十一歳の時点で進路が二つに分かれる能力別の初等中等教育を廃止して、だれもが九年間同じ環境で学ぶ総合制へと一九七〇年代に切り替えたことが大きいらしい。

幼いうちに能力を選別せずに、才能を発揮する機会を公平に与えるのが、その目的であったという。人間にも植物のように、早咲きも遅咲きもあるわけだし、往々にして遅咲きが大物になったりすることがあるから、確かにあまり早い時期に篩にかけるのは考えものである。

しかし一番大きな改革は、フィンランド教育省がカリキュラム作成の権限などを自治体に移譲し、さらに自治体が現場の先生たちに大幅な自由を与えたことだ。学校することは教育省よりも自治体、教室のことは自治体より

も先生がよくわかっているのだから、それは賢明な判断であったといえる。

教科書の選択や授業の進行についてまで、役人があれこれ口出しすると、現場の人間のやる気がうせるに決まっている。もちろん、フィンランドといえども理想の教育などでなく、それなりの弱点や不備もあるに違いないが、現場の先生たちの意思を尊重するという点においては、ぜひ日本の文科省の人たちに、フィンランド詣をしてもらいたい気がする。

相当、閉塞感の強い日本の教育も早晩、フィンランドと同様な方向に向かわざるを得ないと思うが、先生たちもそれを単純に喜んでいくわけにはいかない。なぜなら、与えられた自由を活かすだけの展望と判断力が教師の側に求められることになるからだ。

そのときあわてふためかないように、今からスタートを切っておかなくてはならない。だからこそ、私は現場の先生たちに知性と感性と身体性を磨く時間を十分に与えなくてはいけないと、強く主張する次第なのである。

ぜひ次の学校休みには、できるだけ勤務校から遠く離れた場所で、心ゆくまでバケーションを楽しんでもらいたいものだ。たとえば、校長や教頭先生に睨まれようとも。